

芦屋大学論叢 第76号  
(令和4年3月24日)抜刷

《研究ノート》

フランクフルトから見る  
『イエスとロゴセラピー』に関する一考察

山内佐紀



## 《研究ノート》

### フランクルから見る『イエスとロゴセラピー』に関する一考察

山内 佐紀  
芦屋大学大学院博士後期課程

#### 1. はじめに

フランクル V.E の提唱したロゴセラピーは、宗教に関わらず実践できる心理療法であると彼自身、主張している。つまり、ロゴセラピーは、個人が宗教的であるかどうかを問題にしていない。広岡 (2014) は、ロゴセラピーについて、自分の人生を意味あるものにしたいという「求道的心構え」について触れ、真実の宗教が求める方向と一致するものだと述べる。

フランクル自身は熱心なユダヤ教徒であった。それにもかかわらず、ロゴセラピーはキリスト教信者からも支持を受けていることが以下のレスリーの著述からも理解できる。

レスリー R.C. (1965) は、聖書に基づいてイエスがどのような人々と関わりどのようなアプローチを行ったかについて述べている。彼によると、イエスが行ったことは、人間の治療より人生の転換と関連しており、神と人間を結び付けることを自分の聖務と考えていたのである。レスリーは、ボストン大学大学院で臨床心理学の博士号を得た後、パシフィック神学校を中心に広く活躍した牧会心理学及びカウンセリングの教授であった。この著作では、聖書を基にイエスがどのような人々と関わり、どのようなアプローチを行ったかが記されている。

悩める人自身から自分の悩みの解決法に気づくようにアプローチするという点において、ロゴセラピーとイエスのことばの親和性は、非常に高い。聖書を読み解くうちに、イエスのことばの多くが悩みに対する効果を発揮するという点でロゴセラピーと共通項を持つことに気づかされる。『イエスとロゴセラピー』における人間の精神の反抗的力、実存的空虚、人間の尊厳の回復の観点から、フランクルの思想を探求していく。

#### 2. ロゴセラピーについて

フランクルはロゴセラピーの哲学的基盤として 1. 人間の意志は自由である 2. 人間は誰でも意味への意志を持っている 3. いかなる状況にあっても人生には意味がある、の 3 点を挙げている。

フランクルの高弟であるエリザベート・ルーカスはこの 3 点をロゴセラピーの基本理念として「ロゴセラピーにおける 3 つの柱」と名付けた。

1. の意志の自由とは、なにか意味のあることや、価値のある事を実現させようとする意志で、自分の意志でどのような行動をとるか、自由に決めることができることを示す。

2. の意味への意志とは、フランクルが人間は例外なく、何か意味のある課題や使命を実行したいという深い憧憬を先天的に所有しているという事実を突き止め、名付けたものである。つまり、意味のあることを実現した時、自分の生きていることに意味があるという実感である。

3. のいかなる状況にあっても人生には意味があるとは、たとえどのように絶望的な状況においても、生

きることには意味があり、何か意味のある役割を果たすための責任を負っているということである。

フランクフルは、人生を意味のあるものとするには、創造的な仕事という私たちが人生に与えるものを通して、この世界から私たちが受け取るものを通して、私たちが代えることのできない運命に対して私たちがとる立場を通して、という三つの方法がある、と述べる。つまり、意味は見いだせるものであり、また同時に作り出せるものであると理解できる。この三点は、創造価値・体験価値・態度価値と表現される。

ロゴセラピーをこの3本柱において解釈すると、人間学・心理学・哲学という領域にわたり、人生全体の問題に関わっていると言える。つまり、悩みを抱えた人に対してだけではなく、健康な人に対して、健康に生きるための基本的な姿勢として使うことができるということである。

勝田はロゴセラピーの主要な基本概念として、「実存主義的な背景」「精神次元」「アンタゴニズム（葛藤・摩擦・敵対）」「自由の場」「良心」「治療者のクレド（信条宣言）」を挙げている。実存主義の基本的な考えとしては、自分の本質性は自分自身で見つけなければならないというものであるが、フランクフルのロゴセラピーは人生を肯定する実存主義の流れに属し、存在について考えるよりも、意味について考えるものである。

人間は、身体層と心理層と精神層という3つの存在層の交差点であるが、この3つの合成ではなく、人間の内なる精神的なものが、身体的なものや心的なものとは対決しているとフランクフルは主張している。構造的に示すと、身体・心は相互的に干渉しているが、精神はその上に接地点なく存在している。

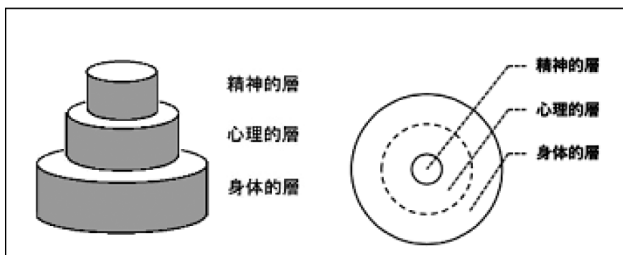


図1 出典：V・E・フランクフル著、霜山徳治訳、『神経症Ⅱ その理論と治療』みすず書房、82頁参照

ゆえに、身体・心は病気になりうるが、精神は病気にならない、とフランクフルは述べる。

「精神が病気になることは絶対にありえないのです。精神的な側面は、いつでも真や偽であり、有効や無効であるだけで、病気になることは決してありません。病気であったり病気になることがあるのは、心理的な側面だけです」<sup>1)</sup>そして、心身が並行関係にあるのに対し、随意的に精神と心は拮抗関係にあると述べる。つまり、精神次元は、心理次元とは別物であり、ここで葛藤＝アンタゴニズムが起こる。

まず、運命と自由に対して、人間が自分の運命に完全に屈してそれに甘んじなくてはならないと考える汎決定論主義に真っ向から反対する立場をロゴセラピーは取っている。フランクフルは人間の自由とは、「人間のあらゆる制約を飛び越え、最も劣悪で過酷な諸条件にも立ち向かい、それに抵抗する自由である。そしてこの自由は私が精神の抵抗力と名付けているものに基づいているのである」

汎決定論とは、人間は、生物学的・心理学的・社会学的などの条件に支配されているという意味では自由ではないが、あらゆる制約に対して態度をとる自由があるという説明がなされている。

汎決定論主義が運命に焦点を当てるのに対し、フランクフルは人間の良心に注目する。彼は意味の探求において、人間は良心に導かれるという。「良心とは、意味を見つける、すなわち言うなれば意味を『嗅ぎつける』ための手段であり、私たちの生きている現代のような意味喪失の時代においては、教育は、伝統や知識

の伝達ではなく、人の良心を洗練させることをその主たる役割としなければならない。良心は伝統や価値の影響が減少していたとしてもそれでもなお意味を見つけることができる唯一の能力なのである」と、良心が伝統や知識に勝ることを主張する。そして、「警告的良心のおかげによってのみ人は実存的空虚すなわち順応主義あるいは全体主義の影響に抵抗することができるのである」つまり、人間は一人ひとり違うものであり、ここに汎決定論に反対するということが表現されている。

フランクフルトは、ロゴセラピーは患者が自らの人生の中に意味を見出すのを援助することを課題としており、人生の主たる関心は人生の意味を充足し、価値を実現することであるというのである。

私見ではあるが、ロゴセラピーは、本来ならば文化・生活の中心であった、迷ったときや苦悩にあえぐときにすがる宗教や伝統がなくなった現代に、あるべきものとも言えるのではないだろうか。このような考え方があるということが理解できているだけで生きづらいと感じた時に救済される人びとがいるはずである。これは、すがるべき宗教や伝統が形骸化した時代においても、人間にとっての意味や価値が根源的に持続し続けることを意味していると思われる。

### 3. イエスとザアカイー人間の精神の反抗的力

「人間の精神の反抗的力」とは本質的に人間存在に固有の可能性を示し、どのような条件にも屈さず立ち向かう精神的存在としての人間の能力を意味している、とフランクフルトは述べる。つまり、しがらみでがんじがらめにされている身動きの取れない状況においても人間に元から備わっている「精神の反抗的力」を使えば自分を解放することができるということが言える。これは、最も人間が人間らしくなるための、精神の自由意志によって運命に反発する能力である。その自由とは、人間のあらゆる制約を飛び越え、最も劣悪で過酷な諸条件にも立ち向かい、それに抵抗する自由である、とフランクフルトは説く。

この反抗力を説明するためにフランクフルトは度々飛行機のたとえを使用している。「飛行機は、自動車と同じように、飛行場を、つまり平面を走ることをやめるわけではなく、それが本当の飛行機であることが証明されるのは、三次元の空中に上昇した時である」飛行機が「飛べるからといって」滑走路を走ることをやめないように、つまり、飛行機は待機場場で待機し、滑走路で助走するとき、車のように地上を走る。だからといってそれが、飛行機でなくなるわけではなく、空中に舞い上がった時に飛行機であることが証明される。人間も同様に、自分自身に向かい合うことができ初めて真の人間としての行動を開始するというのだ。

ザアカイの物語は、新約聖書のルカによる福音書十九章一節から十節に記されている。

『イエスとロゴセラピー』では、聖書の具体的な例として、エリコのザアカイが示される。ザアカイは取税人を生業としており、金持ちであった。イエスがエリコを通った時、背の低いザアカイはイチジクの桑の木に登ってイエスを見た。イエスはザアカイに今日、あなたの家に泊まる、と告げる。人びとは、「イエスは罪深い男の家に入って客となった」と言った。ザアカイはイエスに自分の財産の半分を貧民に施すこと、不正な取り立てをしたときはそれを4倍にして返すことを宣言した。イエスは彼に、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを探して救うために来たのである」と告げる。

ルカによる福音書の短い文章であるが、ザアカイはなぜ罪人なのだろうか。徴税人について聖書では以下の説明がある。

「徴税人(ちょうぜいにん) ローマ政府あるいは領主(ガラリヤではヘロデ・アンティパス)から税金の取り立てを委託された者。異邦人である外国の支配者のために働くばかりでなく、割り当てられた税額以上の金を取り立てて私腹を肥やすという理由で、ユダヤ人から憎まれ、『罪人』と同様に見なされていた」<sup>2)</sup>

ザアカイの場合は徴税人という生業のために、嫌われ者となり、罪人とまで言われている。なぜ徴税人がそこまでの嫌われ方をしたのかというと、ザアカイは、徴税人のかしらで、政治上の高い位置にあったにもかかわらず、宗教的生活を失っていたからである。

さらに、エリコという地は関税の置かれた交通要所であり、ザアカイは徴税人のかしらとして莫大な財を成したであろう。

レスリーは、この話を、いつの時代にも地位を得ようとして共同体から個人的に疎外され孤立してしまう人間の物語として提示し、ここには疎外された人間がどのようにして元の共同体に戻れるかが暗示されている、としている。

現代においても、地域社会において交流のない、疎外された人は珍しくなく、会社や友人関係などにおいても頻繁に見受けられる。孤立を経験しているのは、うまく自分を表現できずに交流ができない場合やコミュニケーション能力が欠けるための誤解だけではないとレスリーは表現する。

また、レスリーは、人間は他者と関係を持つためには何でもすることができるものであるとし、積極的な他者の反応を呼び起こすためなら道化の役割さえ喜んでするのだ、という。これは、いじめにあう子どもが、何とか保身のため道化役を演じていることを想起させる。この子どもは決して喜んで道化師役を演じているのではない。

「あらゆる刑罰の中でも仲間から切り離されるものが最悪である。我われは非行者や犯罪者がしばしば普通の人間関係をあきらめた人間であることを理解しはじめた」<sup>3)</sup>

彼がイエスを見るために木に登ったことは、背が低かったという理由だけではなく、彼が本当は面と向かって人と対面できなかったということ象徴している。嫌われているザアカイは、拒絶される苦しみを味わうはめになるような危険を冒さずに見物できるように木の上に登ったのだとレスリーは解釈している。つまり、コミュニティのメンバーから面と向き合って拒絶されたくはない、しかしイエスがどんな人なのかを確かめたいので、木に登ったのだ。

また、「背が低かったのと、群衆の、おそらく取税長への嫌がらせの妨害とから見るができなかった。」という解釈もなされている。

広岡は「ザアカイ自身もまた自分の在り方を変えたいという一縷の希望を捨てず、イエスという人物にも興味があった。とはいえ、自らがイエスと直面する勇気はさすがにザアカイは持たず、遠くからしかも木の上に登って外延からひっそりとイエスを眺めることにした。レスリーはこの『木の上』にいることについて興味深い説明をしている。英語の up a tree には、『困り果てる』という口語表現があるのだが、まさに木の上にいるザアカイはそうした自分の在り方に『困り果てていた』のであった」という解釈をしている。聖書の物語からは自分を変えたいという意味が見受けられる直接的な部分はないが、最終的にザアカイの発した言葉から推察すると、小さな希望があったのは間違いないと思われる。この希望がザアカイの行動に変化を呼び起こしたのではないか。どうしようもない状況からザアカイがとった行動は、イエスの言葉に応じて

木から降りたことであり、イエスを客として招いたことである。ザアカイとイエスの間にどのような会話があったかは分からないが、「ザアカイよ、下へ降りてきなさい」というイエスの言葉に従ったザアカイはこの時点で人生が変わった。

私見ではあるが、おそらくザアカイは、自身のコミュニティに溶け込めない状況を何とか改善したいと常に考えていたのではないだろうか。そして、そのチャンスを受動的に待っていたのではないだろうか。このイエスの、「下へ降りてきなさい」という行動変容を促す言葉こそがザアカイが一番欲しかった言葉なのだろう。なぜなら、その言葉をきっかけにしなければおそらくイエスを家に招き入れることもなかっただろうからだ。フランクルのロゴセラピーはクライアントが変化する言葉を的確に伝え、自分自身の気づきから行動変化を促すとすれば、イエスの言葉はロゴセラピー以外の何ものでもない。

イエスの呼びかけに素直に応じたザアカイは、過去の自分から精神的に生まれ変わることができた。フランクルはこれを「人間の精神の反抗力」という言葉で説明し、すべての人間には人間精神の中核に、自分のこれまでの悪い習慣に打ち勝とうという決断する力があると言う。この人間の精神的存在の尊さが、このザアカイの内面にも生じたのだ。

ザアカイの行動は今までの行いに打ち勝とうという実存的決断だった。つまり、あらかじめ決められていた運命に向かっていくという主体的決断であった。

フランクルは運命に反抗することについて、「われわれは、自らの運命を、我々の自由のための跳躍台にしなければならない」と述べ、精神の抵抗力を奮い立たせることが常に大切なことを強調した。しかし、レスリーは行動を変化させることが簡単ではないことにも追求し、変化をもたらすような雰囲気が必要であると述べている。何よりも重要なことは二人の人間に存在する一対一の関係であるとし、人間変革の鍵は、対人関係の質の中に明確に存在しているとしている。

イエスがザアカイに「今日、あなたの家に泊まることにする」と踏み込み、イエスが誠実に自らを賭けて関わってきたために、ザアカイは思い切って自己を変革する勇気が持てた。ブーバーは対人関係がどのように行動の様式の変化に関係するかという点に最も貢献した学者である。セラピストや教育者の「我（わたし）」が、患者や被教育者の「汝（あなた）」に意味を持って真剣に結びついたときに初めて「真の治療」が可能となることを指摘したのである。

レスリーは、この点を、「援助する人と不信の壁を破るためにはどれほど自分自身を賭けなければならないかは、ザアカイの出来事の中に鮮やかに証明されている」と表現している。群衆を完全に無視しザアカイの受容をなしたのである。

キリスト教の基準における受容は常に、変化を予期したものである、とレスリーは続ける。「人があるがままに受容するけれども、決してその状態のままに放っておかないのである」

「その変化が完全なものであったことは、イエスの最後の言葉にあらわされている。救いは人間と人間を超えたものとの新しいかたちの結びつきを意味している。救いは、人間対人間の次元と、人間を超えたもの、すなわち神対人間の次元の両次元における関係が積極的になった時、はじめて完全なものとなる。まわりの人間と和解するだけでなく、神とも和解して、すべてのレベルにおける変化がともなわなければならない、どんな変化も完全ではない。それゆえ、人間の生のより高い段階や、彼の霊的な渴望や、神との関係を考慮に入れないようないかなる精神療法も生の重要な領域を見落としていることになる。」<sup>4)</sup>

この章の最後にレスリーは人間の神との関係は、それが人間対人間の交わりに反映されなければ本物ではない、と述べている。つまり、ここからもう一度神は下界に戻り、人間と交わることで「我-汝」の関係を構築することになる。

レスリーは、人間とのつながりというものは、人間が神につながっていることの印である、と確信している。ザアカイの変化は人間の精神の反抗力によるものだけではなく、そこに添えられたイエスのセラピーがあったからこそなのだ。

フランクルのロゴセラピーは自分だけに与えられた人生の意味や価値観を見出すことを基本的な考え方とし、変えることができる状況であれば一緒に変えることを考え、導き出すことである。前述のとおり、フランクルは、ロゴセラピーについての基本的前提として、自由の意思、意味への意思、人生の意味の3点を挙げている。つまり、ザアカイはイエスの言葉により人間の精神の反抗的力により自分自身の運命を変える自由の行使が行えたのだ。

レスリーはフランクルのロゴセラピーについて「フランクルのロゴセラピーの特徴は、こうした、より究極的な価値への関心である。ロゴセラピーの最も独特な面は、個人の責任性を強調することである。それは自己の可能性の開発以上のものを意味する。それはさまざまな価値を認識する責任感であり、最高の価値との関係を選ぶものである。こうした点を強調して、フランクルはイエスの独特なアプローチを支持する」<sup>9)</sup>と述べている。

そのように考えれば、フランクルはイエスのことばを実践したようにすら見える。イエスは行く先々で人びとと短い時間を過ごしながらかことばを交わしていく。それはまさにブリーフセラピー※であり、ロゴセラピーそのものである。

※ブリーフセラピーは問題の原因を個人病理に求めるのではなく、コミュニケーション（相互作用）の変化を促して問題を解決・解消していこうとする心理療法。「原因が何か」ではなく、「今ここで何が起きているのか」（相互作用）を重要視し、未来を想像し、考えることに重点を置く。また、短時間で心理的な問題を改善することを目標としている。

#### 4. 実存的空虚の克服

フランクルは「実存的空虚」について、無益感や空虚感、無意味感といった感覚と表現している。人間は、動物のように何をなすべきか本能が教えてくれず、「自分が何を為さねばならないのか、あるいは何を為すべきなのかを全く知らず、自分が基本的に何をしたいのかについてさえわかっていないこともある」とし、それは無意味感であり、人間をもの化し、非人間化するものであるとしている。フランクルは、人間の始まりにおいて、人間は動物本能、つまりその中に動物の行動が埋め込まれ、それによってその行動が安全に確保されていた基本的動物本能がはく奪され、こうした楽園のような安全性は、永久に人間に対して閉ざされてしまった。しかも、人間の行動を支えてきた伝統が衰退し、何をしなければならぬかを告げる本能が退化し、何をすべきかを告げる伝統も衰退してしまったのである。その代わりに、他の人がしていることをしたいと思い、他の人が自分にしてほしいと思っていることをするのである。つまり、順応主義といった長いものに巻かれようとしたり、個人の自由を制限し、国家や社会全体の利益追求を優先するような全体主義となる、と述べる。



「サマリヤの女」の物語は、新約聖書のヨハネによる福音書四章四節から二十七節に記されている。

レスリーは井戸のそばのサマリヤの女は、フランクフルトが「実存的空虚」と呼んでいるものをみごとに体現しているとし、無意味で単調な仕事が表示されている、と述べている。

フランクフルトは、現代のような意味喪失の時代においては、教育は伝統や知識の伝達ではなく、人の良心を洗練させることをその主たる役割としなければならず、良心は伝統や価値の影響が減少していたとしてもそれでもなお意味を見つけることができる唯一の能力なのである。警告的良心のおかげによってのみ、人は実存的空虚、すなわち順応主義あるいは全体主義の影響に抵抗できるのである、と述べている。

サマリヤの女の話は、イエスがサマリヤの女に井戸の水を飲ませてくださいと伝えるところから始まる。彼女はイエスがサマリヤ人と交流のないユダヤ人であることと、自分の労働を理由に女は拒否する。女はその相手がイエスであることを知らなかった。

サマリヤの女は日常生活の無意味で変わりばえのしないきまりきった仕事をしていたが、イエスに対し、来る日も来る日もわびしく骨の折れる水くみが続けなくていいように、その水をわたしに下さい、と告げた。彼女は人生に何の意味も見い出せなくなっていたので、毎日のつとめを儀式のようになりかえすことは無意味でただ倦怠にしかすぎないと考えていた。つまり、サマリヤの女はフランクフルトが実存的空虚と呼ぶ無益感や無意味感、空虚感、喪失感を表していた。

「フランクフルトが指摘しているようにどうしようもない、とほうにくれているという感情は、病理学的（異常といわれるような）には病気でないということに注意すべきである。実存的な空虚さは病ではなく、全く病状のないところに存在する。（中略）からだもあたまも正常なのだが精神的には病んでいる人間というものの特徴は、人生に目的がないという感情にある。実存的空虚が実際どんなものであるかを認識しようとしなくて、それを価値の世界と照らし合わさずに治療しようとするれば、価値への関心を根本的で正当な意識的関心事としてではなく単なる二義的防衛機制とみなす心理主義共通のあやまりにおちいることになるであろう」<sup>6)</sup>

レスリーは人生に意味を見出すことで絶望から解放されるというフランクフルトの考えを上記のように解説する。

毎日意味を見出すことなく、水汲みをするサマリヤの女に対して、イエスは次のような返答をしている。「この水を飲むものは誰でもまた渴く。しかし、私が与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」この言葉の後、女は「主よ、渴くことがないように、また、ここに汲みに来なくてもいいように、その水をください」と告げている。<sup>7)</sup>

イエスの与える水とは生きる意味である。サマリヤの女が、来る日も来る日も無意味感にさいなまれ実存的空虚に陥っていた時に、イエスに対し生きる意味を与えてくださいと懇願したのだ。

サマリヤの女にとって「生ける水＝生きる意味」を持つことができる生活とは、彼女の仲間や神との関係を疎外している道徳上の問題を解決することであった。

その後、イエスは女に夫を連れてくるように伝えるが、女は夫はいないと答える。イエスは女に5人の夫がいたが、いま連れ添っているのは夫ではない。あなたの言ったことは本当だ、と伝えることで女はイエスが預言者であることを理解した。

「井戸のそばのサマリヤの女の物語は、内的な空虚、すなわち精神的空白が生活の特徴となっているような人間に関する物語である。フランクルのなした大きな貢献の一つは、人間の最も根源的な要求はこの空白を埋めること、すなわち人生に個人的な意味を見出すことにあるとしたことである。空腹を満たす要求であろうと性的衝動を満たす要求であろうと、あるいは地位の獲得や権力を得ようとする要求であろうと、それらすべては究極的な意味の探究にとって二義的なものに過ぎない」<sup>8)</sup>

空腹を満たす欲求とは、マズローの基本的欲求であり、性的衝動を満たす欲求とはフロイト、地位や権力への欲求はアドラーが提唱したことである。それらは、意味への意思にとっては重要ではないことであると断言しているのである。

サマリヤの女が性的な欲求不満であったことは多くの夫を持っていたことから想像できることであるが、フランクルは「見かけの上で性的な欲求不満は実存的欲求不満が真の原因で、性的衝動は実存的空虚によってのみ激しくなる」と記している。

レスリーは、イエスが彼女に対して働きかけた重要な強調点は、この女性の性の快樂による幸福追求が無意味であることを示すことであり、イエスはことあるごとに、重要な目標に付随するに過ぎないものを究極的な目標にさせることの愚かしさを強調している、としている。

フランクルは人間にとって重要なことは、快樂それ自体ではなく、快樂を得るための根拠であり、快樂が実際に人間の志向の内容になり、場合によってはさらに反省の対象になればなるほど、人間は快樂を得るための根拠を見失い、また快樂もなくなってしまう。人間は本来幸福であることを欲しているのではまったくない。むしろ人間は、幸福であるための根拠を持つことを欲している、と性的な欲求に幸福を求めることに対して述べている。すなわち、彼は幸福は追求するものではなく、付いてくるものであり、幸福であるための根拠を持つことを欲しているということで、快樂は人間の努力の目的ではなく、こうした努力の達成の副産物として得られるのだと主張している。

『実存的欲求不満』の『実存的』とは、1. 実存そのもの、すなわち人間独自の存在様式に関して、2. 実存の意味に関して、3. 個人の実存の中に具体的な意味を見出そうとする努力、すなわち意味への意志に関して、である」<sup>9)</sup>

つまり、無意味感などの実存的空虚に陥っていたサマリヤの女はイエスによって精神的空白＝無意味感が埋められた。イエスによって、意味への意志が満たされたのである。

広岡は、サマリヤの女の自らの不道德な行為の結果、彼女は『実存的空虚』な状態に陥ってしまった。そうした途方に暮れた状態で、自らの在り方を何とか改善したいと心の中に明確な目標を持ち、意識的な決断をするならば、過去に犯した過ちからも脱出できるとイエスは考えた、と述べ、実存的欲求不満により生きる意味を不道德な行為に求め、その結果実存的空虚に陥ったと考えることができる。さらに、自分の属するコミュニティからも疎外され、他の人に会いたくないがために、ふつうは朝早くに汲む井戸の水を昼になって汲むということになってしまうという悪循環となった。そこでイエスは、彼女に対して、「道德上の問題を解決する＝良心」を引き出すことで意味への意思が満たされることとなった。

フランクルは「良心とはそれぞれの状況の中に隠れている一回的で独自の意味を探知する直観的能力と定義され、一言でいえば、良心とは意味－器官なのである」と述べている。目や耳が、見たり聞いたりして情報を得る器官であるように、良心は意味をとらえる器官である。また、広岡は、精神科医であるフランクル

思想の独自性は人間の「良心」が神からの言葉であるという発想であり、「良心」の唯一の正しい根拠は、人の姿になぞられた神であることをフランクは確信している、と述べている。

サマリヤの女は、人生の無意味さに終止符を打つのに助けを必要としていた。異なった目標に導かれれば人生は意味あるものになる、ということを知るために「助け」を必要としていたのであった。この、「助け」こそがイエスのロゴセラピーであると考えられる。

コロナ禍にある今、実存的空虚はさらに広まっている。私見ではあるが、現在が異常事態であることを理解し、この経験の意味するところを考える必要があるのかもしれない。それは、危機管理であり、意味を問う訓練にもなるのではないだろうか。

## 5. ゲラサの男の人間の尊厳性の回復

十章では「人間の尊厳性の回復について」、悪霊につかれたゲラサの男の話が展開されている。悪霊につかれたゲラサの男は、新約聖書のマルコによる福音書五章一節～二十節に記されている、統合失調症と思われる病に侵された男がイエスの奇跡により回復する物語である。

統合失調症は、人類の歴史とともに出現した病気であろうと考えられている。現在では、治療薬の開発も進み、専門職による治療チームが治療にあたるのが標準となった。

ゲラサの男の症状は詳細に記されていないが、足枷を引きちぎるなどの暴力行為、石で自分の体を傷つける自傷行為、多くの人につかれたとの訴えから、精神状態が錯乱しており、意思の統一性を失っていることを示している。つまり彼は統一ある人格ではなく、分裂した人格を持っていたのである、と解釈されていることから、統合失調症の陽性症状と考えられる。しかし、このゲラサの男の場合は、統合失調症という病気だけではなくむしろ社会から隔絶された人間という意味合いのほうが大きいのではないかと考えられる。

ロバート・C・レスリーは、イエスがこのゲラサ人と真剣にかかわったのは、人間の尊厳性の回復のためであった、としている。このゲラサ人は、悪霊たちの住みかと思われていた墓場に住み、世間から隔絶された生活を送っており、まさに動物のような生活をしていただろうと容易に想像できる。

さらにレスリーは、人間は自己の尊厳性を奪われた時、病におちいるのである、と記している。また、「イエスのアプローチは、『なんという名前か』であることは、現代の治療者の『どういう風にしてそれがはじまったのか、どんな力に縛られているのか。』という質問に相当する」とレスリー・ウェザーヘッドは解釈し、続けて、この悪霊につかれた人はイエスの助けをかりて、長い間抑圧されてきた感情を明らかにしたのではないかと考えた、と述べている。

私見ではあるが、イエスのとった行動は、現在の精神療法と同様にカウンセリングの基本的態度である共感的理解、無条件の肯定的配慮＝受容であり、ゲラサの男を恐れることなく近づくことで彼に対する受容を示し、名前を聞くことで、その人の存在が固有のものであり、唯一無二の存在であることを証明したのではないかと考える。

「この男性にとって重要なことはイエスが彼を恐れていなかったことであつた。人々は彼が病気だった時も、また後になおった時にも彼を恐れた。(中略)ただ、恐れを超えたところに立っている人、つまり恐れを理解できてしかも恐れの中にひきづりこまれない人だけが彼を救うことができた。そしてイエスはこれが可能だった」<sup>10)</sup>

イエスはゲラサの男の尊厳を回復するために、恐れることなく彼とかかわり、すくいだすことに成功した。それは、イエス自身が、「人間の深み、愛と憎しみの激しさ、敵意とやさしさの同居、利己主義と愛他主義の葛藤を知っていたから」で、この男性の抑制のきかない怒りに気づき、「怒りに支配される必要はない＝けがれた霊よ、この人から出ていけ」と伝えたのだ。

フランクフルは、「人格についての十命題」で、「人格とは個人であり、精神分裂病ですら実際に人格が分裂しているわけではない」とし、「人格は精神的なものであり」「尊厳はただ人格にのみ具わっているもの」と述べている。

「人格の尊厳、一人ひとりの人格が無条件の尊厳を有していることが分かっている人は、同時に人間の人格に対して一たとえその人が病人や不治の病人であっても、さらには不治の精神病患者であっても一無条件の畏敬の念を抱くものです。というのも、実際には『精神』病というものは決して存在しないからです。なぜなら、「精神」、つまり精神的人格それ自身は、そもそも病気になりえないからです」<sup>11)</sup>

つまり、フランクフルは尊厳は精神に具わり、ロゴセラピーについて述べた通り、精神は病に侵されない、この「精神」は、身体、心とは切り離された上位に存在する、と考えている。それは、前面に現れている精神病症状の背後にもなお精神的人格が存在し続けていると表現されることからもうかがえる。故に、統合失調症の患者もその背後に精神的人格があり尊厳が備わっているといえるのである。

ロバート・C・レスリーは「この激しい精神病の挿話は単に自己の組織内の病的な動揺を示しているのではなくて、再生をもとめる苦闘かもしれない」と述べている。ゲラサの男が、病気の平癒後、つまり、汚れた霊＝怒りによる支配がなくなり、人間の尊厳を回復したのちイエスのもとにとどまりたいと願ったのは再生をもとめていたからに違いない。

しかしイエスは受け入れることはなかった。イエスが起こした奇跡を人々に告げるように委ねたからである。元のコミュニティに戻るからこそが、このゲラサの男の課題であり、試練であった。これを耐え、乗り越えて意味を見出した時に、人は再生し、イエスのロゴセラピーは完成するのではないだろうか。

「人間の主たる関心は快樂を獲得したり苦痛を避けることではなく、自らの人生に意味を見出すことであるというのがロゴセラピーの基本的信条の一つなのです。これが、もし確かにその苦悩に意味がある場合には、人は進んでその苦悩に耐えようとするということの理由なのです」<sup>12)</sup>

広岡は、新約聖書に登場するイエスの教えとロゴセラピーの思想がきわめて類似した人間関係であり、個人の人格をどこまでも大切にする姿勢がイエスの教えの根底に存在するために、個々人の意志を重視するロゴセラピーもまた、キリスト教の個々人の代替不可能な価値を強調する点で共通するといえる、と述べている。

私見ではあるが、尊厳がただ人格にのみ具わっている。というフランクフルのことばを当てはめると、人間の尊厳を大切にすイエスの教えが浮かび上がってくるような印象を受ける。困惑し、自分ではどうしようもない思いにとらわれた時、立ち止まり、このイエスとフランクフルのことばを思い出すことは意味あることである。

## 5. おわりに

ロゴセラピーは「実存的空虚」を覚えた人に、「人間の精神の反抗的力」を思い起こさせ、「自らの人格の尊厳を回復」させるもので、そのために、自らが意味を見出すように援助する。ロゴセラピーは人生の意味と同時に意味の探求を中核とする心理療法である。つまり、自分自身の実存的価値を見直すことに意義があると言える。

「イエスとロゴセラピー」では、聖書から選択されたイエスと悩める人の交流が描かれているが、イエスの生きた時代からコミュニティに疎外された人間は多く存在し、聖書を読むことでセラピーを受けることになるということも考察できる。

自分自身の実存的価値を見直すということは、人間が生きていくうえで必ず経験することである。「イエスとロゴセラピー」では、ロゴセラピーとキリスト教との関連性、親和性を考察したが、この聖書の物語は普遍的であり、誰もが経験するといったことや、フランクル自身がロゴセラピーは宗教に関係なく使用できる精神療法であるとしている以上、他の宗教との関連性を説いていく必要性もあるのではないかと考えられる。これは今後の課題としたい。

### <引用文献>

- 1) V・E・フランクル, 山田邦男・松田美佳訳: 『それでも人生にイエスと言う』, 春秋社, 1993, P 64.
- 2) 聖書協会共同訳: 聖書, 日本聖書協会発行, 2018. 付録 pp.35.
- 3) Robert C.LESLIE, "JESUS AND LOGOTHERAPY", ABINGDON PRESS. Nashville, Tennessee. pp.,26.1965.  
ロバート・C・レスリー, 萬代慎逸訳, 『イエスとロゴセラピー』, ルガール社, 1978, pp.32.
- 4) Robert C.Leslie, ibid., "pp.35.  
前掲書, pp.44~45.
- 5) Robert C.Leslie, ibid., "pp.72.  
前掲書, pp.109.
- 6) RobertC. Leslie, "Jesus And Logotherapy", Abingdonpress. Nashville, Tennessee. pp 50.1965.  
ロバート・C・レスリー, 萬代慎逸訳, 『イエスとロゴセラピー』, pp.72-73.
- 7) 『聖書 聖書協会共同訳』, ヨハネによる福音書 4.7-26, pp.166.
- 8) RobertC. Leslie, "Jesus And Logotherapy", Abingdonpress. Nashville, Tennessee. pp 47. 1965.  
ロバート・C・レスリー, 萬代慎逸訳, 『イエスとロゴセラピー』, pp.69.
- 9) Viktor Frankl, Alexander Batthyany, "The Feeling Of Meaninglessness :A Challenge To Psychotherapy And Philosophy". Marquette University Press. Milwaukee. pp.59.1992.  
V・E・フランクル, 広岡義之他訳, 『虚無感について 心理学と哲学への挑戦』, 青土社, 2015, pp.80.
- 10) Robert C.Leslie, ibid, pp.106.  
ロバート・C・レスリー, 萬代慎逸訳, 『イエスとロゴセラピー』, pp.170.
- 11) V・E・フランクル, 山田邦男監訳, 『意味への意志』, 春秋社, 2002, pp.161.
- 12) V・E・フランクル, 山田邦男監訳, 『意味による癒し ロゴセラピー入門』, 春秋社, 2000, pp.29.

**<参考文献>**

- ・勝田茅生,『ロゴセラピー入門シリーズ1 フランクルの生涯とロゴセラピー』,システムパブリカ,2008.
- ・V・E・フランクル,山田邦男・松田美佳訳,『それでも人生にイエスと言う』,春秋社,1993.
- ・増田誉雄/村瀬俊夫/山口昇編,『新聖書注解』,いのちのことば社,1973.
- ・V・E・フランクル,山田邦男監訳,岡本哲雄・雨宮徹・今井伸和訳,『人間とは何か 実存的な精神療法』,2011.
- ・広岡義之,『フランクル人生論入門』,新教出版社,2014.
- ・川野雅資編集,『精神看護学Ⅱ 精神臨床看護学 第6版』,ヌーヴェルヒロカワ,2015.
- ・V・E・フランクル,山田邦男監訳,『意味による癒し ログセラピー入門』,春秋社,2004.
- ・V・E・フランクル,霜山徳治訳,『神経症Ⅱ その理論と治療』,みすず書房.